

展覧会のお知らせ

■常設展示

「小川原脩自伝風な展覧会—春・水辺」

会期：7月12日（日）まで

「小川原脩自伝風な展覧会—夏・空よ！」

小川原脩は幼少の頃から羊蹄山とニセコの山々とともに広がる「空」を見て育ちました。作品の随所に現れる空をテーマに小川原作品をご紹介します。

会期：7月18日（土）～10月18日（日）

■企画展示

「武田志麻版画展～雲海のシンフォニー～」

会期：7月12日（日）まで

「しりべしミュージアムロード共同展『道—On the Road』」

今年も、有島記念館・西村計雄記念美術館・荒井記念美術館・木田金次郎美術館との5館共同展がはじまります。今年のテーマは「道」。小川原脩記念美術館ではそれぞれの芸術家の『帰り道』にまつわる作品をご紹介します。

会期：7月18日（土）～8月30日（日）

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

【ミュージアム・シネマ】

日時：7月4日（土）14時～15時30分

「ハーブ&ドロシー アートの森の小さな巨人」（2008年、アメリカ）

コツコツと集めた2000点もの美術品を美術館に寄贈した、ニューヨークに住む夫婦の感動と驚きのドキュメンタリー映画です。ぜひお越しください。

【北海道の美術入門】

日時：7月25日（土）14時～15時

「木田金次郎とフランス美術」

いずれも

講師：柴 勤（当館館長）

会場：当館映像ルーム

聴講無料



海と山と田園と ミュージアムロード情報

ミュージアムロード共同展

『道— On the road』各館テーマ

- ・木田金次郎美術館「絵がたどってきた道」
- ・荒井記念美術館「ピカソが歩いてきた道」
- ・西村計雄美記念美術館「北海道遺産」
- ・有島記念館「2つの道」

木版画にチャレンジ

6月6・13日に小川原脩記念美術館で、技法体験ワークショップ「多色木版のレッスン」が開催されました。講師を務めた武田志麻さん（写真右端）は赤井川村在住の木版画家で、美術館では7月12日まで武田さんの作品展が開かれています。

町内外から7～70歳と幅広い年代の人たち計10名が参加し、美術館をモチーフにして、木版画でポストカードを作りました。

彫刻刀を久しぶりに握るという参加者も多く、懐かしさと新鮮さを感じているようでした。摺りの段階に入ると、作業に没頭する人もいました。ある参加者は「いざ摺ってみるとイメージ通りにはいかないけれど、それもまた面白いね」と話していました。

完成したポストカードと版木（木版画の原版）を「宝物だね」と言っている人もいました。木版画の魅力を存分に味わった参加者たちは、笑顔で「宝物」を持ち帰りました。



感動一点 の場

『火山湖の犬』

1970年 小川原 脩 画

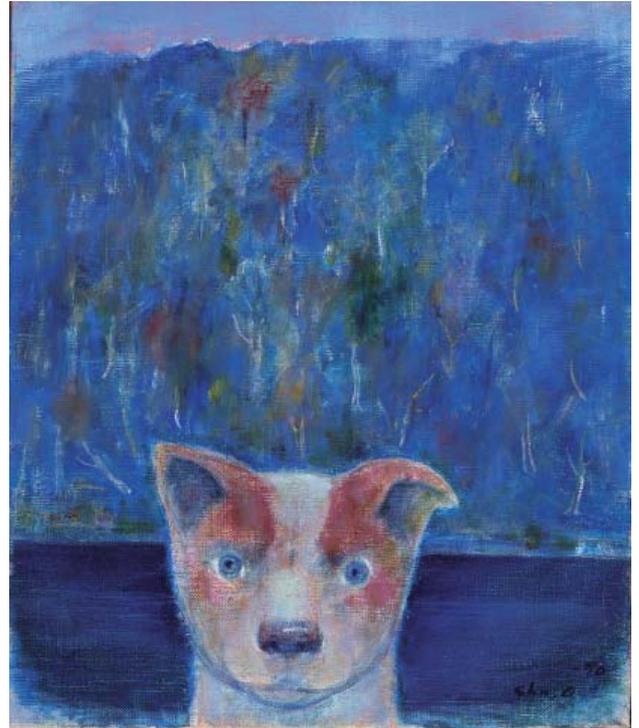
6月13日、小雨の降る中、今年も羊蹄山が山開きをした。本格的な夏山登山のシーズン到来である。片道5時間、高低差1600m、俱知安に住む我々にとっては、眺めるには身近でも、なかなか近くて遠い山ではないだろうか。

火山湖とはその名の通り火山の噴火によってできた湖のこと。羊蹄山の麓にも火山湖があるー「半月湖」である。

小川原脩はこの湖を好んで散策したようで、「いいところでしょう 好きな所ですよ」という言葉とともに半月湖周辺の白樺林を案内して歩く写真記事が残っている。

1970年頃、小川原は透き通るような淡いブルーの瞳でこちらを覗く犬を、度々登場させている。犬たちは雪山から並んで顔を出すもの、たくらみを企てる男たちを見据えるもの、組合せはさまざま。この犬の見つめる先は、澄んだ湖面か、それとも…。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 学芸員）



ふる探訪 さと

388回

— クスサン —

自然の中に命の営みが満ちる季節になった。同時に、虫も満ち満ちている。風土館の前庭には、サクラ、ミズナラ、オニグルミ、そしてキタコブシなどの樹木などのこんもりとした森がある。広がった葉っぱを見ると、もう色々なイモムシやケムシがいるはいるは。

最も大きな葉をつけるトチノキでは、長い白髪を生やした緑色のケムシがさかんに葉を食べている。バリバリと葉を食べる音がしそうだ。成長すると全身を白く長い毛が覆うので白髪太郎（しらがたろう）と呼ぶ地域もある。今月の中ごろには10センチ近くに育ち、サナギになる準備が整うと、繭を紡ぐために食樹から移動を始める。

故郷の紀伊半島の南部では、梅雨時になると庭や畑の隅に植えられたクリの木がおびたしいクスサンの幼虫に軒並み丸裸にされるのが毎年のことだった。そこで、マユを紡ぐ直前の幼虫を捕らえては溺死させ、魚釣りのテグスを自作したものだった。幼虫体内のマユの材料を取り出してしてテグスにするのである。



マユは木の枝先につくられることが多い。2～3枚の葉の間に半分隠れた薄茶色のマユは手で裂くことはできないほど強靱で、だからこそテグスをつくったのだが、そのような遊びは北海道では見られないと聞く。

お盆を過ぎると大きな成虫が現れる。山中の駐車場などで成虫が道路照明の周りを飛び回る姿を見ることも少なくない。口器が退化しているので食物をとることはできない。活動に必要なエネルギーは幼虫時代に体内に蓄えた養分でまかなわれる。そのためか、成虫の寿命はせいぜい2～3日とかなり短い。成虫は子孫を残す段階なのだ。繁殖を終えた後に長生きする必要がないのである。

文：岡崎 毅（俱知安風土館館長）